



Title	<Book Review>Social Motivations for Codeswitching : Evidence from Africa
Author(s)	竹村, 景子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 1995, 6, p. 39-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Carol MYERS-SCOTTON

Social Motivations for Codeswitching: Evidence from Africa (『コードスイッチのための社会的モチベーション：アフリカの事例が立証すること』), Oxford, Clarendon Press, 1993, xii+177pp.

竹 村 景 子

I. 本書は、オックスフォード言語接触研究叢書(Oxford Studies in Language Contact)の中の一冊である(同叢書には、バヌアツ、ストラスブール、シンガポール、フランス語圏カナダ、パプア・ニューギニア、エルサレムにおける、それぞれに特徴的な社会言語学的問題を扱った研究書が含まれている)。その副題が示す通り、アフリカの多言語社会のコンテキストから収集したデータ(主にケニアの首都ナイロビにおける会話現象)を元に、同一会話内で二言語、もしくはそれ以上の多言語を使用すること、すなわちコードスイッチが行なわれる際の「社会的モチベーション」に焦点を当て、それらモチベーションの一般的概念を説明することを目的とした理論を展開している。著者は、コードスイッチという現象を、ある一言語で発話を始めたにもかかわらず、その言語のみで発話を完了することが不可能だという人の「代替戦略」としてではなく、ある種の「技術的パフォーマンス」として捉えている。

II. 本書の構成は以下の通りである。

第1章：はじめに

- ・目的とトピック
- ・本書で考えるコードスイッチ
- ・コードスイッチと借用の比較
- ・記述テーマと理論テーマ
- ・まとめ

第2章：アフリカの環境

- ・ジンバブエの言語

- ・ケニアの言語
- ・スワヒリ語の台頭
- ・アフリカにおける公用語選択
- ・二言語併用のパターン
- ・リングフランカ(地域共通語)の使用
- ・他言語使用地域内での二言語併用のパターン
- ・言語使用パターン
- ・まとめ

第3章：調査対象としてコードスイッチが浮上した背景

- ・コードスイッチに対する最近の関心
- ・コードスイッチが有数の調査対象になっていること
- ・コードスイッチに対する一般的見解
- ・コードスイッチへの関心の定着
- ・ガンパーツによるコードスイッチの解釈
- ・状況によるスイッチと隠喩によるスイッチ
- ・ガンパーツ理論の拡張
- ・ガンパーツの見解への批評
- ・ガンパーツの理論的貢献
- ・小集団の相互作用と自然発生的データ
- ・コンテキストに見られる言語使用の社会的意味
- ・社会的戦略としての言語選択
- ・相互作用的社会言語学における主要な影響
- ・「相互作用モデル」の限界
- ・コードスイッチに対する近年のもう一つのアプローチ
- ・結論

第4章：有標性モデルのためのモチベーション

- ・有標性モデル
- ・伝達能力
- ・有標性メトリック

- ・有標性
- ・コード選択に関する有標性
- ・社会的コンテキスト
- ・重要点の特徴
- ・指標付与としての言語選択
- ・重要点と指標付与
- ・コードのR0(rights-and-obligations; 的確で必須の)セットの表示法の例証
- ・指標付与の特定の読み方がいかに発展するか
- ・慣習化された変換
- ・言語共同体と社会的ネットワーク
- ・有標性モデルと「配分のパラダイム」
- ・相互作用的パラダイムと戦略アプローチ
- ・相互作用行動としての会話
- ・目的達成のための言語
- ・伝達意志
- ・合理的行為者としての話者
- ・コードスイッチにおける「社会的行為」のための経験に基づくサポート
- ・言語は道具であることに気付くこと
- ・話者の選択を動機づけているものは何か
- ・まとめ

第5章：コードスイッチの有標性モデル

- ・交渉原理
- ・無標選択としてのコードスイッチ
- ・有標選択としてのコードスイッチ
- ・探求的選択としてのコードスイッチ(探求的コードスイッチ)
- ・中立化の戦略としてのコードスイッチ
- ・尊敬表示の戦略としてのコードスイッチ
- ・技巧的格言とコードスイッチ
- ・結論

第6章：結論

- ・ 一般的議論：総合
- ・ 選択を予知すること
- ・ 認知に則った社会的知識の相互作用

参考文献

索引

Ⅲ. では、具体的に各章の概観を提示していこう。

【第1章】 イントロダクションである本章では、著者が用いている「コードスイッチ」というタームは、「同一会話内で数種の言語が交替すること」を定義するものであると、最初に断っている。なぜならば、こういった現象を「コードミックス」と「コードスイッチ」という二つのタームを用いて議論する場合もあるからだが、両者をまとめて言い表わせるのが「コードスイッチ」だとする立場である。「コードミックス」は、一般的に一つの文章中に数種の言語交替が見られることを指し、「コードスイッチ」は(文章中ではなく)会話中での言語交替を指す。しかし、文章中に言語交替が起きるのが、話者の何らかの心理作用によるものであると仮定すれば、両者は共に同様の社会心理学的モチベーションを有すると考えられる。したがって著者は、事例引用の際、(文章)構造的制限を考慮すべきものについては、「同一文章内」なのか、「同一会話内」なのかを明示することで両者を区別はしているが、カバータームとして「コードスイッチ」を使用しているのである。また、本書で扱うコードスイッチは、あくまでも異なる言語の交替のみであって、ある言語とその方言(地域方言、社会方言など全てを指す)との交替は含まないとしている。

本書の目的として挙げられているのは、「二言語併用の話者が、一言語のみを使用するのではなく、わざわざ二言語を同一会話内で使用すること(つまり、コードスイッチを行なうこと)で得るメリットは何なのか?」という問いに答えることである。そして、コードスイッチの裏に隠されている社会心理学的モチベーションを説明するために、主にケニアのナイロビで過去20年間(1968-88)に渡って著者自身及び研究助手によって収集されたデータが用いられること、それを補助する形で、他のサハラ以南アフリカ諸国でのデータも例示されることを明記してある。著者が依拠する理論は「有標性モデル」というものだが、それについては後述する。

【第2章】 英語を公用語とする二国、ケニアとジンバブエからのデータが主な分析材料となっていることから、ここではこの二国の言語状況についてかなり詳しく説明がなされている。アフリカを学んでいる者であれば、サハラ以南アフリカの国々での言語状況—多言語国家であること、旧宗主国語の影響力、民族語の存亡、地域共通語の存在等—について、多少なりとも知識は持っているだろう。しかし、本書が広く社会学、心理学、言語学を一般に学ぶ者に読まれるであろうことを想定しているため、例えばスワヒリ語やショナ語といったパンツ—諸語の簡単な文法説明、ケニア、ジンバブエの言語分布地図、独立以来の言語政策の概観が示されている。特に、他のサハラ以南アフリカの諸国同様、ケニアとジンバブエの両国にとって、公用語の選択が非常に難しいこと（著者はその理由を四つに分類して説明している：①公用語として選択されるべき、十分な話者人口及び政治的支配力を有する民族語が存在しないこと、②しかしながら、他の比較的小さな民族語を圧倒できる、支配的言語が幾つか存在すること、③もしも広範に使用される民族語＝地域共通語が存在しても、その社会経済的ステイタスが突出していないことか、もしくは、ある民族だけにメリットが大きすぎるかの理由によって、その言語は多くの民族から公用語として認められないこと、④民族間の中立性を維持するためには、旧宗主国語を選択せざるを得ないこと）を簡潔に述べていることと、タンザニアに比してケニアでは、スワヒリ語を公用語（国家語）として受け入れる確固たる土壌がないことを指摘していることは、社会言語学的にも非常に有用であろう。他にも、両国での様々な民族語が使用される場面、数言語でのコードスイッチが起こる状況、英語使用が好まれる現状についての有益な説明が随所に見られたが、惜しむらくは、（文章中で言及されている箇所もあるが）各民族語の話者数やナイロビやハラレといった民族の坩堝である都市の人口分布を明示しなかったことである。収集されたデータと共にこれらの表があることで、言語間の力関係や多言語が交錯する状況が、頭の中に容易に浮かび上がったのではないかと思う。

【第3章】 本章では、「コードスイッチ」という現象が如何にして研究対象となってきたか、また、著者自身がコードスイッチを引き起こす社会心理学的モチベーションについて調査しようとした契機、理由について述べてある。特に、これまでの研究はジョン・ガンパーツが提唱した理論を批判したり、それをさらに発展させたりしていることで進歩を遂げてきたことを挙げている。ガンパーツの行なった研究では、コードスイッチが決してエ

キゾチックなものではないこと、つまり、発展途上地域にのみ起こることではないことと、言語を巧みに操る「技能的」な行為であることが証明されており、その点が現在に至るまで突出していると指摘している。また、ラボフをはじめとする幾多の社会言語学者が行なった、1960-80年代の調査結果とそれに導き出されたコードスイッチの枠組みに言及、コメントし、著者自身が導き出した理論モデルは、その枠組みをさらに修正したものになることを次章以下で論じていくと結んでいる。

【第4章】 いよいよ中核に入る。まとめると、会話能力、有標性、社会的コンテキストの役割、言語学的コードの指標付与、配分のパラダイム、相互作用的／戦略的パラダイム、会話目的、合理的行為者としての話者、の順で論を展開している。最も重要なのは「有標性」というタームだと思われるが、ここでの意味は、話者がある会話において、会話の参加者全員から期待される／(ある場合には)期待されない言語を用いることによって、特別の意志表示を行なうこと、つまりは指標付与が行なわれていることを指す。例えば、以下のような例が挙げられている(p.82-83)。

(西ケニアの田舎の酒場。その場にいる人は全てLuyia語のいずれかの変種を話す。…第1話者は農夫で、スワヒリ語も少しなら話せる。第2話者は、現在都市部に出稼ぎに行き、賃金労働者をしているが、里帰り中である。…第1話者が金のことを切り出すまでは、会話はほとんどLuyia語のみで行なわれていた。)

1 : Khu inzi khuli menyi hanu inzala-(*ℓ*)

(lit. ここに住んでると、空腹でなあ…)

2 : (口をはさんで) Njaa gani?(*ℓ*)

(どんな空腹だよ?)

1 : Yenza khunzirila hanu-(*ℓ*)

(lit. 空腹が俺を殺したいんだよ…)

2 : (口をはさんで; さらに語気を強めて) Njaa gani?(*ℓ*)

(どんな空腹だよ?)

1 : Vana veru-(*ℓ*)

(子供たちがよ…)

2 : Nakuuliza, njaa gani?(*ℓ*)

(だから、どんな空腹だって聞いているんだよ！)

1 : Inzala ya mapesa, kambuli. (ル)

(金が無いから空腹なんだ。一文無しなんだよ。)

2 : You have got a land. (英)

(土地があるじゃないか。)

1 : Mwana mweru— (ル)

(なあ、きょうだいよ…)

2 : Mbula tsisendi. (ル)

(俺だって金なんか無いよ。)

(引用中、(ル)=Luyia語、(ス)=スワヒリ語、(英)=英語)

西ケニアの、ほとんどの人が母語をLuyia語(の一変種)とする地域で、お互いに母語のみで会話が成立するコンテキストでありながら、第2話者がスワヒリ語にスイッチしたことは、「金の無心」というトピックにおいてスワヒリ語(もしくは英語)という「外のグループ」との会話で用いるコードを使用することにより、第1話者との間に「距離」を置きたい、社会的地位の違いを見せつけたい、という意識が働いた、という分析がなされている。つまり、ここでのスワヒリ語使用は‘marked choice’「有標性選択」なのである。ちなみに、二言語併用が至極当たり前になっている都市部では、その二言語でのコードスイッチは有標性モデルではないことも指摘されている(例えば、ハラレでのショナ語と英語によるスイッチ)。

有標性モデルが現われる際のポイントは、会話内での話者の地位であるというのが著者の見解である。どのような発話においても、聞き手が受ける影響というのは無視できないはずだが、有標性選択をした場合には、話者が自分の地位を誇示したいか、少なくとも自身の認識力を提示したいということに基づいているというのである。

【第5章】本章では、様々な状況設定でのコードスイッチの事例を挙げて、それが有標なのか無標なのか、有標であればその裏にあるモチベーションは一体何なのか、どういう場面では有標になり得るのか、といったことを説明している。例えば、以下の例を見てみよう。

(例1) ナイロビのホテルで、若い男性が若い女性にダンスを申し込んでいる。(p.146)

男：Nisaidie na dance, tafadhali.

(ダンスをお願いしたいのですが。)

女：Nimechoka. Pengine nyimbo ifuatayo.

(疲れてるの。次の曲にして下さらない?)

男：Hii ndiyo nyimbo ninayopenda.

(この曲は、僕の好きな曲なんです。)

女：Nimechoka!

(疲れてるんだってば!)

男：Tafadhali—

(どうか…)

女：(さえぎって) Ah, stop bugging me.

(ああ、もう、邪魔しないでよ!)

男：I'm sorry. I didn't mean to bug you, but I can't help it if I like this song.

(すみません。あなたの邪魔をするつもりではなかったんです。ただ、この曲が好きなので、つい。)

女：OK, then, in that case, we can dance.

(わかったわ。それなら踊ってあげるわ。)

(引用中、ゴシックは英語、その他はスワヒリ語。)

(例2) 英語の良くできる12歳の男の子が、その父親の英語の問いに対し、彼らの母語であるルオ語で返答している。

父：Where have you been?

(一体どこに行ってたんだ?)

子：Onyango nende adlu aora, baba.

(川に行っていたのです、お父さん。)

(引用中、ゴシックは英語、その他はルオ語。)

著者は、例1を「探求的コードスイッチ」、例2を「尊敬表示の戦略としてのコードスイッチ」の事例として扱っている。例1では、スワヒリ語を用いている間はダンスに誘うことができなかつたにもかかわらず、女性の英語につられてそのまま英語で返答した途端に、色良い返事がもらえたことから、英語が「的確で必須の」コードだったわけである。

例2では、教育を受けている少年はもちろん英語が使えるのだが、その声色から父親の機嫌が非常に悪いことを読み取って、父親の方が知識的に地位が上であることを示すのに有効な「的確で必須の」コードとして、母語であるルオ語を選択したのである。

どのようなコードスイッチも、結局は以下の4つのモチベーションのうちの1つから起こると分類されている。①無標性選択の連続体としてのコードスイッチ（連続的無標コードスイッチ）は、状況的要因が（聞き手との）相互作用の中で変化し、話者がそれら要因と自分の発話内容とを合わせるために、新しい無標の「的確で必須の」コードに指標付与しようと望む際に起こる、②無標コードスイッチは、話者が相互作用に対して、同時に2つのアイデンティティもしくは「態度」を示すことを望む際に起こる、③有標コードスイッチは、話者が無標のものとは違う「的確で必須の」コードをうまく処理しようと望む際に起こる、④探求的コードスイッチは、無標の「的確で必須の」コードが不明確な際に起こる。そして、「有標性」という概念は、これら4つのコードスイッチを統合する概念だというのが著者のまとめでもある。

【第6章】 まとめの章であることから、些か前章までの内容と重複するのであるが、本書で扱った問題は、コードスイッチには社会心理学的モチベーションが存在するのかどうかという点であり、それを議論するためにアフリカというコンテクストから得られる例を用いたので、同時に、アフリカの諸言語と英語やフランス語とのコードスイッチのタイプを記述することにもなった、と述べている（実際、評者などは、コードスイッチに関する理論そのものよりも、ナイロビやラゴス、ハラレで収集されたデータを読むことの方が興味深かった）。

著者が提唱した「有標性モデル」とは、コードスイッチが行なわれる中で、「話者が（幾つかの言語を操る技術を）「知っている」ということを会話上意図的に示すことに基づいており、さらに、聞き手も「知っている」ことを前提として作用するもの」である。したがって、「如何なる話者であろうとも、特別の選択の下にある言語を使用していることが会話の参加者の共通の理解の下にない限りは、その選択は有効的なものにならない」わけで、「逆に言えば、（個人の言語使用の）選択決定がなされていない場合は、会話の参加者の共通理解は社会的に制約されている」と言えるのである。しかし、著者も再三指摘している通り、コードスイッチを行なうには必ずそれを行なえるだけの「知識」を要するのであり、

何らかの指標を付与するために「的確で必須の」コードを選択する「有標性」の選択の存在は、アフリカの事例に限らずかなり普遍的であると言える。評者が今後コードスイッチについて考察していくとすれば、ケニア、タンザニアにおけるスワヒリ語、英語、民族語の多重使用の状況がメインになり、社会心理学的な理論よりも、実際の使用頻度に重点を置くことになるであろうが、その際にも、「有標性モデル」という枠組みには十分注意を払うべきだと考えている。

IV. サハラ以南アフリカの言語問題を考える時、コードスイッチという現象は避けて通ることができない。つねづね、ある言語共同体が異なる言語共同体と接触した場合、もしくは、ある多言語使用者がその母語とは異なる言語を持つ別の多言語使用者と接触した場合の、言語使用そのものとその社会的背景、及び言語選択の意味を研究したいと思ってきた。その意味で、本書が、言語学的に有用であるだけでなく、社会学的にも非常に有効な多くの自然発話を提示してくれていることは、評者にとって大変参考になった。

タンザニアの言語状況を鑑みて、スワヒリ語の学術専門用語が整備されていないことから発生するコードスイッチについては、次のように述べられたことがある。「学術専門用語に関して言及する場合に起こる、スワヒリ語と英語の間でのコードスイッチは、教育において二言語併用を行なうタンザニアの、この特殊な発展段階におけるごく自然な表現方法、言い替えれば通常の表現方法だと考えるべきである。（教師も生徒も、コードスイッチを行なった場合には、不当に非難されるべきではないし、そのコードスイッチが不適当だなどと感じる必要もない。コードスイッチという行動には、かなりの言語的能力が含まれるという十分な証拠がある。）」(下線評者, Rubagumya, C. M. (ed.), 1989, Language in Education in Africa: A Tanzanian Perspective, Multilingual Matters Ltd., pp.32-33.)ケニアの場合もタンザニアと同様、教育において二言語もしくは三言語併用しており、コードスイッチが様々な会話の中で頻繁に見られるのは、ごく自然なことである。著者は、そのごく自然なコードスイッチという行為に対しては、言語接触という現象から引き起こされる、社会心理学的モチベーションが存在するのだとしている。そして、ケニアとジンバブエだけではなく、セネガル、ナイジェリア、ザイール、ガーナからの自然発話を例示しながら、展開してきた理論がアフリカのごく限られた地域にのみあてはまるのではなく、非常に一般的な論であることを証明して見せた。

国家語や公用語の浸透と、決して少なくない数の民族語の存亡の危機を考えると、母語、近隣民族語、地域共通語、そして旧宗主国語の関係は、様々な角度から考察する必要がある。今後ますます、「多言語国家」としてのケニア、ジンバブエ、もしくはサハラ以南アフリカのいずれかの国について、言語政策あるいは言語計画といった社会言語学の問題を取り扱う際、このコードスイッチという現象に言及する必要性が出てくるだろうし、最も重要な課題となってくるだろう。その裏には、旧宗主国との関係、世界経済との繋がり、民族問題、階級問題などといった、表面的には言語とは直接関係がないように思われる事柄が潜んでいるからだ。著者が「前書き」の部分で述べているように、本書は、「会話における他の話者との関係からある話者が行なう表現や干渉に関連した伝達目的の表示といった、社会語用理論に関心のある読者に向けられたものであると同時に、読者は、まず第一に、その専門分野が何であろうと、社会言語学者、社会人類学者、社会心理学者の素養を必要とされる。(しかしながら)また本書は、アフリカニストにとっても、興味深い一冊としてアクセス可能な一冊」だと言えるであろう。